

第2回国際生物学賞授賞式に列席して

清水 建 美

国際生物学賞 International Prize for Biology は、天皇陛下御在位 60 年と陛下の長年にわたる生物学の御研究をお慶び申し上げ、これを記念するとともに生物学の奨励を図るために、昭和60年に設けられた。受賞者は、生物学の研究において世界的にすぐれた業績をあげ、世界の学術の進歩に大きな貢献をした個人、原則として毎年 1 人と定められ、授賞者は日本学術振興会（文部省の外郭機関）に設けられた国際生物学賞委員会となっている。授賞されるべき学問分野は、各年度毎に決められるが、昨年、つまり、第 1 回と今年の第 2 回は系統分類学を中心とする生物学とされた。参考までに、受賞者には賞状、賞牌、賞金 1,000 万円が贈られ、陛下からは何がしかの賜品が下賜されることになっている。

さて、第 1 回の受賞者はケンブリッジ大学名誉教授の E. J. H. Corner 博士であった。博士は、第二次世界大戦中および戦後にシンガポール植物園にいたことがあり、日本では一般には「昭南島物語」の著者として知られている。博士の著書には、そのほか "Wayside trees of Malaya I, II" があり、私は「昭南島物語」は、マラヤ大学の友人からプレゼントされたし、"Wayside" はクアラルンプールで購入してもっているの、面識はなかったが、ある程度の親近感を覚えていた方ではあった。しかし、分類・系統学の面できわ立った業績は何かと考えてみると、正直なところ、種子植物にあるのではなく、菌類学にあるらしい。ともかく幅広い業績を残されたことは確かである。

第 2 回の受賞者は、現役、弱冠 50 歳 5 ヶ月のアメリカ合衆国ミズーリ植物園長・ワシントン大学教授の Peter Hamilton Raven 博士であった。私は、1980 年夏にミズーリ植物園ではじめて逢って以来 1982 年 9 月には同植物園でおこなわれたシンポジウムに出席、その後、植物資料の交換などもしているのである程度の知己の仲であった。そんな関係からか、第 1 回の折には授賞式後のシンポジウムに 1 日参加しただけであったが、今回は授賞式そのものへの招待をうけたので上京した。

授賞式は、11月20日、11時半から、東京は上野公園内の日本学士院二階の階段状会議室でおこなわれた。

式典の参加者ほぼ 100 人が着席したあと、受賞者

夫妻、首相代理の官房長官、文相が入場、しばらくおいて皇太子御夫妻を起立してお迎えしてメンバーが揃った。式の次第は、

1. 開式の辞
2. 国際生物学賞委員会委員長の式辞……有沢広己
委員長病欠のため、山村雄一審査委員長が代読した。
3. 審査経過報告……山村雄一審査委員長
4. 授賞と賜品の伝達……同委員長
5. 皇太子殿下のおことは
6. 祝辞……首相祝辞と文相祝辞 首相欠席のため
官房長官が代読
7. 受賞者あいさつ
8. 閉式の辞

で、この間約 40 分であった。祝辞や配布された資料によると Raven 博士の受賞の理由は、

- (1) アカバナ科を材料とし、細胞分類学や比較生物学など、多角的に最新の解析手法を駆使して種子植物の分類・進化学的な研究を大型共同研究として組織化したこと。
- (2) 花と花粉昆虫との共役進化の研究の基礎をつけたこと。
- (3) Biology of plant (1970 年初版) や Biology (1986 年初版) を著わし、生物学全般に植物分類学を通して有益な影響を与えたこと。
- (4) 野生植物の確保や種の保全につき国際的に指導的役割を果たすとともに、ミズーリ植物園を熱帯植物学の研究センターとして熱帯植物の保護に寄与したこと。

ということになる。私自身博士の活躍ぶりをみていて最も感心するのは研究の規模の大きさと抜群の組織力である。たとえば、中国との国交回復後まっ先に 1980 年以降数次にわたって中国へ大きな植物調査団を送り込んでいるし、中国からは何人もの研究者を米国へ招いている。博士の活躍には全く国境はなく、私のところへも研究材料の提供の要請があり、事実、信州大学の標本の数十点は現在ミズーリ植物園に貸し出されており、その中の 1 枚は植物画作成のために北京の植物園に回送されているといった調子である。

私にとって皇太子殿下のおことはとくに印象深いかうかがうことができた。博士の業績にふれられな

がら、地球上における植物の危機的な状況を指摘され、植物分類・系統学の重要性をここんと説かれたのである。日本いや世界の生物学の趨勢は、必ずしも分類学にとって有利ではない。科学の進歩はひたすらに分析に走り、総合性を評価する方向にはない。殿下のおことばのように、この方面の学問が装いを新たに盛況になることを願いたいものである。

式後、地下の食堂で皇太子殿下御夫妻も御臨席の上、立食パーティーがおこなわれた。当然、Raven 博士とは挨拶を交わし、若干の会話を楽しんだが、殿下とも何年かぶりでお話できた。実は殿下とは、信州へお出での折、2 回ほどお話を申し上げたことがあり、光栄にもよく覚えておられた。当日は最近さし上げた著書を話題とされた。

受賞式の翌日と翌々日は、京都国際会館において、「生物群集における進化と相互適応」という大テーマで国際シンポジウムがもたれ、最後は「生物資源と地球の安定」と題する博士の記念講演でしめくくられた。実をいうと、この記念講演は、地球の人口の分布の現在と将来像に関する数字を挙げながら、自然と人間のバランスを強調したもので、特別に新鮮味のある内容ではなかった。第1回受賞時の記念講演とシンポジウム講演の内容は、Modern Aspects of Species と題する1冊の本(¥9,000)として東大出版会から出たばかりなので、今回の諸講演の内容も来年になれば単行本となるだろう。

聞くところによると国際生物学賞の台所は大へんだということである。来賓や主催者の祝辞は、同音に基礎生物学の重要性を述べていたが、心底重要とするならば募金への依存度を小さくすべきであろう。一方、天皇陛下の御在位60年から発想されたこの賞に反対する動きもないわけではない。心底重要とするならば、陛下の御在位年数に関係なくつとに出発させるべきではなかったか。巷には御在位60年に絡めた行事や商法があまりにも多くありはしないかと思う。日本で誕生した国際生物学賞が、その純粋性を喪失することなく、末永く存続し、基礎生物学の充実と発展のために貢献することを心から願うものである。

私は Raven 博士に昨年出版された名著の評の高いテキスト“Bilogy”と拙著“日本アルプスの花(講談社)”との交換を申し込んだところ、すぐ O. K. の返事が来、追いかけるように航空便で2月2日にその著書が届いた。それは、セントルイスにあるワシントン大学の生物学教授 G. B. Johnson 博士との共著になるもので、A4判54章、1198頁、付録・術語集・索引など95頁からなる巨大なテキストであった。値段は分らないが、これほどのテキストをアメリカの大学生が購入し読んでいるとしたら、漫画読みにいそむ日本の大学生は足元へも寄れないことになるだろう。日本は果してアメリカに比肩しうる経済大国なのであろうか。

〔新刊紹介〕 篠原昭ほか(編)「バイオテクノロジー入門—21世紀への革新技術」A5判277頁 2,200円、培風館、昭和61年9月。

この本は、信州大学が昭和60年度から始めたSBCによる放送公開講座テレビ講座の第2年度の企画「生物工学——バイオテクノロジーの展開」の一般向けのテキストとして書かれたものである。執筆者は、本会会員である農学部教授氏原暉男氏をはじめ、信大農・繊維・医・理各学部の教官のほか王子製紙の研究員1名を加えて総勢30名である。章立ては、「第1章バイオテクノロジー」から「第13章バイオメカニクス」まで、遺伝→組換え・細胞融合・細胞培養・組織培養の技術の紹介から、カイコ・ウシ・クワ・園芸植物の具体的な生物を対象としたテクノロジーの実践活動の記録、そして、医薬品の製造や人工器官の製作へと、現代のバイテクのあらゆる分野を網羅して解説してあるので問題点の所在が理解できて大へん重宝である。(T. S. 生)

〔新刊紹介〕 池上義信(監修)石沢進(編集)「新潟県植物分布図集 第7集」A4判458頁 口絵写真10頁、合本カード式、限定500部、〒別6,000円、植物同好じねんじょ会、1986年12月。

1年1冊のペースは確実に守られて、第6集発行からちょうど1年後、第7集の完成をみた。本号には、№551ウチワゴケに始まり№650コイチョウランまでの100種の分布図のほか「新潟県における植物分布の類型(7)」「新潟県におけるキツネノカミソリの分布と生態」など5篇の論文および本誌の植物ニュースにあたる短報15篇が掲載されている。このシリーズは、第10集刊行を目標にしていると聞くと、大勢の同好の諸氏が同一ペースで10年余にわたる仕事を維持していくというのは、私の経験からしても並大抵のことではない。新潟県の一般の植物研究のレベルが抜群であることを意味すると思われる。長野県植物研究会にとっては、大いなる驚異であり、また一大刺激剤でもある。(T. S. 生)